



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	幼児をもつ親を対象としたペアレンティングプログラムにおける開催方法の検討 - 育児態度とストレスへの効果に着目して -
Author(s)	大野, 真美;澤田, いずみ;今野, 美紀;田畑, 久江;浅利, 剛史;渡邊, 真理
Citation	札幌保健科学雑誌,第 4 号:33-40
Issue Date	2015 年 3 月 1 日
DOI	10.15114/sjhs.4.33
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6301
Type	Research Paper
Additional Information	
File Information	n2186621X433.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

研究報告

幼児をもつ親を対象としたペアレンティングプログラムにおける開催方法の検討 —育児態度とストレスへの効果に着目して—

大野真実¹⁾、澤田いずみ¹⁾、今野美紀¹⁾、田畑久江¹⁾、浅利剛史¹⁾、渡邊真理²⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 元札幌市立大学大学院看護学研究科

本研究の目的は、異なる開催方法で行ったペアレンティングプログラムにおける、親の育児態度とストレスへの効果を明らかにすることである。平日午前中 (Group A) または、休日午前・午後連続開催 (Group B) のプログラムに参加した親18名に、参加前後で自記式質問用紙を配布し、回答を得た。結果、どちらの開催方法でも効果が得られたが、各群で効果が表れた部分は異なった。親の育児態度では、両群共に「子育て場面における親のふるまい方」、「子育て役割に対する親の認識」が改善し、Group Bは「子どもの問題行動に対する親の認識」も改善した。親のストレスでは、Group Aは「不安」、Group Bは「ストレス」、「抑うつ」が改善した。その他、Group Bでは応募者の増加、夫婦や市外からの参加もみられた。このことから、様々なライフスタイルをもつ親に合わせてプログラムを開催する意義が見いだされた。

キーワード：ペアレンティングプログラム、子育て支援、開催方法、育児態度、親のストレス

Analysis of different methods for implementation of the parenting program for the parents of the toddlers:

Focus on effectiveness of the parenting attitude and stress.

Mami ONO¹⁾, Izumi SAWADA¹⁾, Miki KONNO¹⁾, Hisae TABATA¹⁾,
Tsuyoshi ASARI¹⁾, Mari WATANABE²⁾

¹⁾ Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Formerly, Graduate School of Nursing, Sapporo City University

The purpose of the study was to examine the efficacy of different methods for implementation of a parenting program, especially with regard to the parenting attitude and stress. The participants were the parents of the toddlers (N=18) who participated in one of two programs: Group-A (on weekday mornings) and Group-B (during holidays in the daytime) who answered a self-administered questionnaire. Both methods were effective even though the efficacy differed. With regard to the parenting attitude, both groups showed improvements in the "parenting style" and "perceived level of the parenting role." For parental stress, "anxiety" was reduced in Group-A and "depression" and "stress" were reduced in Group-B. Moreover, in Group-B, the "parents' perceptions of prosocial and difficult behaviors in their children" improved, with an increased number of participants, and increased participation of couples and parents from the suburbs. These results indicate that different implementation methods can be used for parents having different lifestyles.

Key words : Parenting Program, Parenting Support, Implementation Method, Parenting Attitude,
Parental Stress

Sapporo J. Health Sci. 4:33-40(2015)

I はじめに

近年、子育ての困難さが深刻な社会的問題となっている。平成25年度の出生数は102万9,816人と過去最低を記録し、合計特殊出生率は1.43であり¹⁾、少子化が進む中で、子育ての伝承不全、子育ての孤立感と負担感の増加、子育て支援機関の不足を背景に、子育てをめぐる環境の改善が求められている²⁾。

幼児期は第1次反抗期が始まり、親が子育てに悩みを感じやすく、支援を必要とする時期である。著者らは、平成24年度から大学の公開講座の中でペアレンティングプログラムを実施している。具体的には、幼児をもつ親を対象とした子育て支援の連続講座として開催し³⁾、その中でペアレンティングプログラムの一つである、「トリプルP (Positive Parenting Program)」⁴⁾を用いている。これは、1980年代にオーストラリアで開発されたものであり、現在、世界15か国以上で実践と評価研究が実施されている。日本では「前向き子育てプログラム」という名称で、全国各地で開催されている⁵⁾。前向き子育てプログラム(以下、プログラム)は、地域で暮らす親を対象に、親としての自分を大切にすること、親が子どもと良い関係をつくることを重要視すること、子どものしつけの問題についての実際的な問題解決について親自身が気づき、実践できることに焦点を当てた介入を行っている⁶⁾。このプログラムの実施により育児態度や親のストレス、子どもの問題行動の改善が報告されている^{7) 8)}。実施内容は、17の子育て技術について学ぶグループワークとその技術を実際に各家庭の状況と目標に合わせて実践した報告や悩みについてサポートをする電話セッションである(図1)。本来は全8週間のプログラムであり、平日に開催していたが、来学を要する連続講座である為に有職者の参加が困難であるという課題があった。この問題に対応する為に、著者らは同じ内容のプログラムを来学回数および開催期間を短縮した方法での実施を試みた。そこで本研究は、異なる開催方法で行ったペアレンティングプログラムにおける、親の育児態度とストレスへの効果を明らかにすることを目的に検討することにした。

II 実施方法

1. 参加者

本研究の参加者は、平成24年度から著者らが所属する大学構内において、年2回定期開催しているプログラムを受講した親であり、本研究の参加に同意した者とした。また、本プログラムが対応可能な子どもの対象年齢に合わせ、参加者が相談したい子どもの年齢を2歳～6歳の幼児をもつ親とした。参加者の募集方法は、保健所・保健センター、子育て支援センターでの案内、ホームページやソーシャル

ネットワークでの告知を通して、親が著者らへ直接申し込むことにした。

参加者にかかる費用は、札幌医科大学学術振興事業より助成を得た上で、自己負担分をワークブック代金2,000円(夫婦での参加の場合は3,000円)、託児を希望する場合は子ども1人につき1回500円(2人目以降は1回250円)とした。

2. 調査期間

2013年2月～2014年3月とした。

3. 介入方法

本研究では、開催方法の違いにより参加者をGroup AとGroup Bに分け、プログラムの内容は両群共に同一にした。具体的な開催方法について、Group Aは従来の方法で開催したプログラムの参加者とした。Group Aが参加したプログラムは全8週間で構成されている。開催時期は2013年2月～3月と、2013年8月～10月であった。プログラム参加者は、平日の午前中に週1回2時間の頻度で計4週間来学し、前向きな子育ての考え方や技術についてグループワークを行う。その後、第5～7週目は週1回電話によるサポートを受けながら家庭で技術を使い、第8週目には再び平日午前中に来学し、プログラムのまとめを行い修了した。Group Bは、休日の午前午後で開催したプログラムの参加者とした。開催時期は2014年2月～3月だった。Group Aで第1～2週目、第3～4週目で行ったグループワークを連続で行うことで来学頻度を減らし、介入期間を計6週間に短縮した。プログラムの運営はファシリテーター資格を持つ看護学科教員を中心に、市町村保健師、助産師の計7名で行った。なお、プログラムの開催方法を変更することについては、プログラムの運営法人である、Triple P Japan⁵⁾から許可を得た上で実施した。

4. 評価方法

親の育児態度と親のストレスについては、記名の自記式質問用紙(以下、アンケートとする)の回答を用いた。アンケートで使用した尺度は、Triple P Japan⁵⁾が指定したプログラム参加前後に実施するものであり、日本語訳が作成されている。その他、参加者の基本属性についての回答と、プログラムについての感想(自由記載)を求めた。以下に、親の育児態度と親のストレスについての質問内容を示す。

1) 親の育児態度について

育児態度の評価は、「子どもの問題行動に対する親の認識」としてStrength and Difficulties Questionnaire⁹⁾(以下、SDQとする)、「子育て場面における親のふるまい方」としてParenting Scale¹⁰⁾(以下、PSとする)、「子育て役割に対する親の認識」としてParenting Experience Survey^{11) 12)}(以下、PESとする)を用いた。

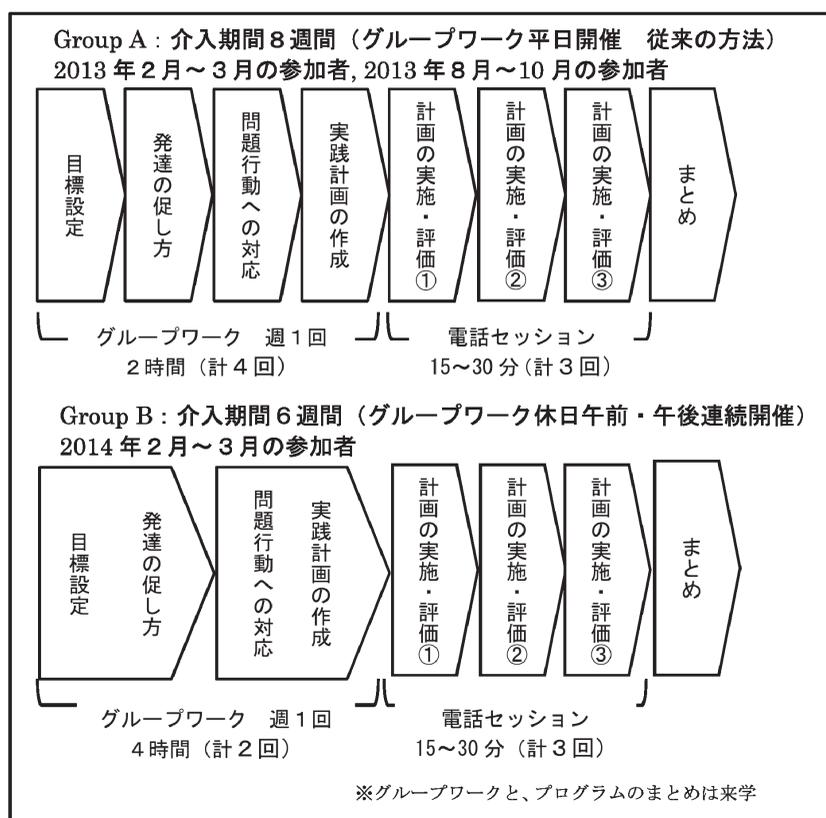


図1 各群のプログラム開催方法と内容

SDQは、子どもの社会的行動、交友問題、多動性、行為問題、感情的症状という5つの下位尺度計25項目で構成された3件法の尺度である。社会的行動は、得点が高いほど望ましい行動であると解釈し、社会的行動以外は得点が高いほど問題行動であると解釈する。また、社会的行動以外の4下位尺度は、各尺度の得点の他に、「難しい行動の合計」として4下位尺度の合計も算出する。日本ではMatsuishiらが妥当性の検証を行っている¹³⁾。

PSは、手ぬるさ、過剰反応、多弁という3つの下位尺度計30項目で構成された7件法の尺度である。いずれの下位尺度も、得点が高いほどその傾向が強いと解釈する。日本版は井潤によって妥当性が検証されている¹⁴⁾。

PESは、子どもの行動のむずかしさ(子育て困難感)、親役割(むくわれ感、すべきことの多さ、ストレス、確かな結果が出るという感じ、落ち込み)、親としての自信と、支援受容感、パートナーとのしつけの一致、協力感、幸福感について5件法、計11項目で構成されている。PESはSandars¹¹⁾らが、親を対象にした子どもとの生活調査の中で用いた質問10項目と、Dyadic Adjustment, Scale¹⁵⁾から採用された、パートナーとの関係に対する幸福感についての質問1項目から作成されている。いずれの項目も、得点が高いほどその傾向が強いと解釈する。

2) 親のストレスについて

親のストレスは、「親の抑うつ・不安・ストレス」を評

価するDepression Anxiety Stress Scales (以下、DASSとする)を用いた¹⁶⁾。これは、抑うつ、不安、ストレスの3つの下位尺度計42項目から構成された3件法の尺度である。いずれの下位尺度も、得点が高いほどその傾向が強いと解釈する。現在のところ日本語版の標準化は行われていない。

5. 分析方法

1) 親の育児態度について

(1) プログラム参加前・参加後それぞれにおける、Group AとGroup Bの比較

SDQの各下位尺度および、社会的行動以外の4下位尺度の合計(難しい行動の合計)、PSの各下位尺度および合計、PESの各項目について、Mann-WhitneyのU検定を用いて検証した。

(2) Group AとGroup B各群内の、プログラム参加前後の比較

SDQの各下位尺度および、社会的行動以外の4下位尺度の合計(難しい行動の合計)、PSの各下位尺度および合計、PESの各下位尺度についてWilcoxonの符号順位検定を用いて検証した。

2) 親のストレスについて

DASSの各下位尺度について、プログラム参加前・参加後それぞれにおけるGroup AとGroup Bの比較については、Mann-WhitneyのU検定を用いて検証し、Group AとGroup B

各群内のプログラム参加前後の比較については、Wilcoxonの符号順位検定を用いて検証した。

各質問項目の欠損値は、Triple P Japan⁵⁾が指定している値を代入して処理したが、事後アンケートの未返送者については分析から除外した。なお、有意水準は5%未満とした。統計学的分析にはSPSS Statistics21を用いた。更に、自由記載部分からプログラムの内容に関連した記述を抽出し、共同研究者と共に評価を行った。

6. 倫理的配慮

プログラムの開始時に、プログラム前後で実施するアンケート結果については、参加者個人へのフィードバックに使用するとともに、プログラムの評価のために研究として使用する旨とその方法、データは個人が特定されないようにして扱うこと、データは厳密に保管すること等を書面と口頭で説明し、同意書への署名をもって研究参加への同意を得た。また、データ入力には個人が特定される部分は匿名化した後に行った。なお、本研究は所属大学の倫理委員会の承認を得ている。

III 結 果

1. 参加者の概要について (表1)

各群共に参加者は9名だった。応募人数は、Group Aが9名、Group Bが13名だった。アンケートについて、プログラム(事前)は両群共に回収率は100%であり、有効回答数はGroup Aが7名、Group Bが6名だった。プログラム(事後)については、Group Bの回収率は100%、有効回答数は9名であり、Group Aの回収率は88.9%、有効回答数は8名だった。

Group Aの参加者は全員が女性、市内からの参加であり、有職者は4名だった。Group Bは女性8名、男性1名、有職者6名であり、2名が市外からの参加だった。また、Group Bは夫婦での参加が1組だった。年齢は両群共に30代~40代であり、子どもの数は1人~3人、相談したい子どもの年齢は2歳~6歳だった。また、両群共に参加者の約9割が専門学校以上の学歴を有しており、7割以上が世帯年収を500万円以上であると回答していた。

表1 参加者の属性

		全体 (n=18)		Group A (n=9)		Group B (n=9)	
		回答数	(%)	回答数	(%)	回答数	(%)
参加者数		18	(100.0)	9	(50.0)	9	(50.0)
性別	男性	1	(5.6)	0	(0.0)	1	(11.1)
	女性	17	(94.4)	9	(100.0)	8	(88.9)
年齢	30代	13	(72.2)	5	(55.6)	8	(88.9)
	40代	4	(22.2)	3	(33.3)	1	(11.1)
	無回答	1	(5.6)	1	(11.1)	0	(0.0)
職業	フルタイム・パート	10	(55.6)	4	(44.4)	6	(66.7)
	専業主婦	8	(44.4)	5	(55.6)	3	(33.3)
居住地	市内	16	(88.9)	9	(100.0)	7	(77.8)
	市外	2	(11.1)	0	(0.0)	2	(22.2)
子の数	1人	8	(44.4)	6	(66.7)	2	(22.2)
	2人	7	(38.9)	2	(22.2)	5	(55.6)
	3人	3	(16.7)	1	(11.1)	2	(22.2)
相談対象である子の年齢	2歳	4	(22.2)	2	(22.2)	2	(22.2)
	3歳	7	(38.9)	4	(44.4)	3	(33.3)
	4歳	3	(16.7)	1	(11.1)	2	(22.2)
	5歳	2	(11.1)	1	(11.1)	1	(11.1)
	6歳	2	(11.1)	1	(11.1)	1	(11.1)
世帯年収	300万円未満	1	(5.6)	1	(11.1)	0	(0.0)
	300-500万円	3	(16.7)	1	(11.1)	2	(22.2)
	500-700万円	4	(22.2)	2	(22.2)	2	(22.2)
	700-1000万円	7	(38.9)	3	(33.3)	4	(44.4)
	1000万円以上	3	(16.7)	2	(22.2)	1	(11.1)
最終学歴	高等学校	2	(11.1)	1	(11.1)	1	(11.1)
	専門学校以上	16	(88.9)	8	(88.9)	8	(88.9)

表2 各群における参加前後の親の育児態度 (SDQ, PS) の変化

	群	N	Median (IQR)			群	N	Median (IQR)	
			参加前	参加後				参加前	参加後
SDQ_社交	A	8	7.00(4.25-8.00)	7.00(6.00-8.75)	PS_多弁	A*	8	4.00(2.86-4.79)	2.86(2.40-3.11)
	B*	9	5.00(3.50-6.50)	6.00(5.00-9.50)		B	9	3.71(3.07-4.07)	3.00(2.43-3.36)
SDQ_交友	A	8	2.00(1.00-3.75)	2.00(1.00-3.00)	PS_過剰反応	A*	8	4.10(3.25-5.68)	3.10(2.73-3.88)
	B	9	2.00(2.00-3.00)	2.00(1.00-3.50)		B*	9	3.90(3.40-4.70)	2.70(1.75-3.55)
SDQ_多動	A	8	3.00(2.00-3.00)	3.00(3.00-5.75)	PS_手ぬるさ	A*	8	3.78(3.64-4.07)	2.78(2.25-3.27)
	B	9	4.00(2.50-5.50)	4.00(2.00-5.00)		B**	9	3.45(3.23-4.05)	2.55(2.14-3.36)
SDQ_行為	A	8	2.00(1.25-4.50)	2.00(1.00-2.00)	PS_合計	A*	8	3.75(3.43-4.52)	2.89(2.28-3.05)
	B	9	2.00(1.00-3.50)	2.00(1.00-2.50)		B*	9	3.47(3.32-4.15)	2.53(2.25-3.25)
SDQ_感情	A	8	1.00(0.00-2.75)	1.00(0.25-2.00)	Wilcoxon符号順位 検定 * $P < .05$, ** $P < .01$				
	B	9	1.00(0.50-3.00)	1.00(0.00-1.50)					
SDQ_難しい 行動合計	A	8	7.00(6.25-13.75)	8.50(8.00-10.75)					
	B*	9	9.00(8.00-13.00)	7.00(6.50-11.00)					

表3 各群における参加前後の親の育児態度 (PES) の変化

	群	N	Median (IQR)			群	N	Median (IQR)	
			参加前	参加後				参加前	参加後
PES_子育て困難感	A	8	3.00(2.25-3.75)	2.00(2.00-3.00)	PES_親役割 親としての自信	A	8	2.00(2.00-2.75)	3.00(2.00-3.75)
	B*	9	4.00(2.00-4.00)	2.00(2.00-3.00)		B	9	3.00(2.50-3.50)	3.00(2.00-4.00)
PES_親役割 むくわれ感	A	8	2.50(2.00-3.00)	3.00(2.25-4.00)	PES_支援受容 感	A	8	3.50(2.00-4.75)	4.00(3.25-5.00)
	B	9	3.00(2.50-4.00)	4.00(2.00-4.50)		B	9	3.00(2.00-4.00)	4.00(2.00-4.50)
PES_親役割 すべきことの多さ	A	8	2.00(2.00-3.75)	2.50(2.00-3.00)	PES_パートナー しつけの一致	A	8	3.50(3.00-4.00)	3.50(2.25-4.00)
	B	9	2.00(2.00-3.00)	2.00(2.00-3.00)		B	9	3.00(2.00-3.50)	3.00(2.00-4.00)
PES_親役割 ストレス	A	8	3.00(2.00-3.75)	3.00(2.00-3.75)	PES_パートナー 協力感	A	8	4.00(3.00-4.75)	4.00(3.25-4.00)
	B	9	2.00(2.00-4.00)	3.00(2.00-2.50)		B	9	3.00(2.00-5.00)	4.00(3.00-4.00)
PES_親役割 確かな結果が出る	A*	8	1.00(1.00-3.00)	3.50(2.00-4.00)	PES_パートナー 幸福感	A*	8	3.50(3.00-4.75)	4.50(3.25-5.00)
	B**	9	2.00(1.50-3.50)	5.00(4.00-5.00)		B*	9	3.00(2.50-5.00)	4.00(3.00-5.00)
PES_親役割 落ち込み	A	8	2.50(2.00-3.75)	2.00(1.00-3.75)	Wilcoxon符号順位 検定 * $P < .05$, ** $P < .01$				
	B	9	2.00(2.00-3.50)	2.00(1.50-3.00)					

2. 各群における親の育児態度と親のストレスについて

1) 親の育児態度について

(1) プログラム参加前・参加後それぞれにおける、Group AとGroup Bの比較

プログラム参加前・参加後における、Group AとGroup Bの親の育児態度の比較について、Mann-WhitneyのU検定を用いて検証したところ、プログラム参加前ではSDQ、PS、PESに差はなかった。これは、事後アンケートの回答が得られなかった1名の事前アンケート結果を含めても同様だった。プログラム参加後では、PESの「子育ては確かな結果が出ると感じる」($p=.011$)で有意な差がみられた。

(2) Group AとGroup B各群内の、プログラム参加前後の比較(表2、3)

Group AとGroup B各群内の、プログラム参加前後の親の育児態度の比較について、Wilcoxonの符号順位検定を用いて検証したところ以下の結果が得られた。

プログラム参加前後のSDQの変化については、Group A

は参加前後でSDQのすべての項目に有意な差が見られなかったが、Group Bにおいては、社交的行動で有意な増加($p=.017$)、難しい行動の合計で有意な低下がみられた($p=.034$)。

プログラム参加前後のPSの変化については、Group Aは、参加前後で多弁($p=.025$)、過剰反応($p=.017$)、手ぬるさ($p=.012$)、PS値合計($p=.012$)全てにおいて有意な低下が見られた。Group Bにおいては、参加前後で過剰反応($p=.015$)、手ぬるさ($p=.008$)、PS値合計($p=.008$)において有意な低下がみられた。多弁については、有意ではないが、値が低下していた。

プログラム参加前後のPESの変化については、Group Aは参加前後で「子育ては確かな結果が出ると感じる」($p=.014$)と、「パートナーとの幸福感」($p=.034$)で値が有意に増加していた。Group Bは「子育ての困難感」が有意に低下し($p=.037$)、「子育ては確かな結果が出ると感じる」($p=.007$)と「パートナーとの幸福感」($p=.046$)で値

表4 各群における参加前後の親のストレスの変化

	群	N	Median (IQR)	
DASS_ ストレス	A	8	7.50 (6.25-14.25)	5.50 (1.00-10.00)
	B*	9	9.00 (4.00-20.00)	6.00 (2.50-15.00)
DASS_不安	A*	8	2.50 (1.25-3.00)	1.00 (0.00-1.75)
	B	9	1.00 (0.50-4.00)	3.00 (1.00-4.50)
DASS_ 抑うつ	A	8	4.50 (0.25-6.00)	2.00 (0.00-5.75)
	B*	9	1.00 (1.00-3.50)	0.00 (0.00-3.00)

Wilcoxon符号順位 検定 * $P < .05$

が有意に増加していた。

2) 親のストレスについて (表4)

(1) プログラム参加前・参加後それぞれにおける、Group AとGroup Bの比較

プログラム参加前・参加後における、Group AとGroup Bの親のストレスの比較について、Mann-WhitneyのU検定を用いて検証したところ、共にGroup AとGroup BのDASSの各下位尺度に差はなかった。これは、事後アンケートの回答が得られなかった1名の事前アンケート結果を含めても同様であった。

(2) Group AとGroup B各群内の、プログラム参加前後の比較

Group AとGroup B各群内の、プログラム参加前後での親のストレスの比較についてDASSを用いてWilcoxonの符号順位検定を用いて検証したところ、Group Aは参加前後で不安が有意に低下していた ($p=.040$)。また、ストレスと抑うつについても有意ではないが値が低下していた。Group Bはストレス ($p=.012$) と抑うつ ($p=.047$) で有意な低下がみられた。不安の値は増加していたが、有意な差はなかった。

3. プログラムの感想 (自由記載) について

プログラムの内容に関連した自由記載では、Group Bにおいては、来学の回数が少ないことや、休日開催であること、託児を利用できることが参加を後押ししたという記載があった。一方、両群共に進行が速く覚えるのが困難だという記載もみられた。

IV 考 察

1. 参加者の属性について

本研究の参加者のほとんどが本プログラムを開催した都市部に居住していた。また、参加者について、学歴が高く、世帯年収が全国平均¹⁷⁾よりも高いことは、石津らの調査⁷⁾と同様であった。また、石津らは⁷⁾3歳児健診においてプログラム開催の広報を行っており、相談の対象としたい子どもの年齢も3歳が中心だったが、本研究において、相談の対象としたい子どもの年齢も半数以上が3歳以下であった。幼児期は、第1次反抗期が始まり子育てに悩みを感じ

やすい時期であることから、今回の参加者は、地域の中でも子育て技術を学ぶ意欲があり介入効果が期待できる集団であったといえる。従って、幼児期の子どもの親に焦点をあて、子育て支援の連続講座を開催したことは適切であったと考える。

2. 異なる開催方法におけるプログラムの効果について

本研究では、開催方法を変更した群 (Group B) と従来の方法で実施した群 (Group A) いずれにおいてもプログラム実施の効果がみられた。しかし、その効果については各群で若干の違いがみられた。

1) 親の育児態度への効果について

「子どもの問題行動に対する親の認識」(SDQ) については、Group Bにおいて社会的行動と難しい行動の合計で有意な改善が見られた。本研究の参加者はMatsuishiらの結果¹⁹⁾と比較し、交友問題、行為問題、感情的症状が高い傾向があるが、推奨している得点の正常範囲内であった。Group Aでは参加前後で有意な差がみられなかったが、個人個人の参加前後の値を見ると、著しく改善している者と、悪化している者がいることから、全体の結果として表した場合に、有意な差として現れなかったと考える。従って、介入によるSDQの効果は今後も引き続き検討していく必要がある。

「子育て場面における親のふるまい方」(PS) については、両群共に改善がみられていた。特に、本研究の参加者は、Arnold⁴⁰⁾らの基準と比較して手ぬるさの値が高かったが、両群共にプログラム参加後に手ぬるさの値が有意に改善していた。ArnoldらはPSの手ぬるさの臨床範囲を2.80 ($SD=\pm 1.00$) としているが、井潤⁴¹⁾が地域で暮らす親を対象とした得点平均は4.00 ($SD=\pm .93$) だったと報告していることから、日本においては手ぬるさの項目が高くなる傾向があることも考えられる。このことから、いずれの開催方法においても子育て場面における親のふるまい方に効果があったと考える。

「子育て役割に対する親の認識」(PES) については、特に親役割 (確かな結果が出るという感じ) とパートナーとの幸福感について、両群共に有意な改善みられていた。これら2項目については、プログラムの中に、子どもとの良好な関係を構築するための技術を学び、実践していくことや、子どもに一貫した躰を行う上でパートナーと話し合う機会をもつことが含まれていることが効果として現れたと考えられる。また、親役割 (確かな結果が出るという感じ) については、Group Bの方がGroup Aよりも有意に値が高いが、これは参加前の値においても、有意な差は無いがGroup Bの方が高いことが関連していると考えられる。これらことから、本プログラムでは子どもの問題行動の変化よりも先に、親自身の子育てについてのふるまいや、感じ方、親自身のストレスの改善に効果が表れたと考える。これは、親としての自分を大切にするというプログラムの

原則⁶⁾が活かされた結果とも考えられる。

2) 親のストレスへの効果について

「親の抑うつ・不安・ストレス」(DASS)については、先行研究⁷⁾と比較して両群共に参加前後のいずれの項目も値は低く、Lovibondら¹⁶⁾が設定した正常範囲内であった。各群別にみると、Group Bではストレスと抑うつの項目で有意な改善、Group Aで不安の項目で有意な改善がみられていた。また、有意差はないがGroup AのストレスとGroup Bの抑うつも改善していた。Group Bにおいて、有意差はないものの不安の項目が増加していたことについては、DASSは必ずしも子育てに関係する不安についてのみ問う尺度ではないため、仕事や、子どもと配偶者以外の家族との関係といった他の要因が関連していたことも考えられる。しかし、今回は子育て以外の不安については聞いておらず、他の要因との関連は明らかではないため、今後の課題である。生活の中で育児がどのように位置づけられているかは参加者によって異なるかもしれない。しかし、プログラム参加後にGroup Bのストレスが有意に改善していることをみると、子育てが親の主要なストレスであると共に、子育て支援は全般的な親のメンタルヘルスに役立つことが考えられる。従って、なおのこと様々なライフスタイルをもつ親が参加可能なプログラムを実施することに意義があると考えられる。

その他、自由記載からはGroup Bについては託児があることと、休日開催であることが参加の後押しになったという感想が見られた。実際、Group Bではプログラムの応募人数が増加していた。従って今回のプログラムにおいては、休日開催だけでなく、託児を設置したことについても有職者や遠方居住者といった多様なライフスタイルをもつ親の参加が可能になったと考える。しかし、両グループ共に、週1回のグループワークであったとしても、進行が早いことや覚えることが多いという感想があったことは今後の課題である。このことから、フォローアッププログラムなどの継続支援を取り入れる必要がある。また、本研究の限界として対象者が各グループ9名と少ないことが挙げられる。開催方法によって効果に差が生じないかどうかは引き続き検討を続ける必要がある。

V 結 論

異なる開催方法でペアレンティングプログラムを実施したところ、どちらの開催方法でも効果が得られたが、各群で効果が表れた部分は異なった。親の育児態度では、両群共に「子育て場面における親のふるまい方」、「子育て役割に対する親の認識」が改善し、Group Bは「子どもの問題行動に対する親の認識」も改善した。親のストレスでは、Group Aは「不安」、Group Bは「ストレス」、「抑うつ」が改善した。その他、Group Bでは応募者の増加、夫婦や市外からの参加もみられた。このことから、様々なライフ

スタイルをもつ親に合わせてプログラムを開催する意義が見いだされた。

謝 辞

本学における子育てプログラムに参加された皆様に感謝申し上げます。本研究は、「看護系大学における子育て支援活動とその評価—ペアレンティングプログラムの親に及ぼす効果(研究代表者:澤田いずみ)」の研究の一部として行われた。また、本研究の一部を日本家族看護学会第21回学術集会で発表した。

本研究は、平成25年度札幌医科大学学術振興事業(公開講座等開催助成)より助成を受けている。開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 厚生労働省:平成25年(2013)人口動態統計(確定数)の概況. 2013
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei13/dl/00_all.pdf (2014-9-24)
- 2) 厚生労働省:平成25年版厚生労働白書 資料編. 雇用均等・児童福祉. 2013
<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13-2/dl/07.pdf> (2014-9-24)
- 3) 澤田いずみ, 田畑久江:大学におけるトリプルPを活用した子育て支援活動と教育における意義. 小児看護 36:204-210, 2013
- 4) Sanders, M. R.:Triple P-Positive Parenting Program: Towards an empirically validated multilevel parenting and family support strategy for the prevention of behavior and emotional problems in children. Clin Child Fam Psychol Rev. 2:71-90, 1999
- 5) NPO法人Triple P Japan.
<http://www.triplep-japan.org/> (2014-9-24)
- 6) 加藤則子:前向き子育てプログラム(トリプルP)の紹介. 小児保健研究65:527-533, 2006
- 7) 石津博子, 益子まり, 藤生道子他:前向き子育てプログラム(Positive parenting Program:Triple P)による介入効果の検証. 小児保健研究67:487-495, 2008
- 8) 中島範子, 藤田一郎:前向き子育てプログラム(トリプルP)が親子の心理行動面に及ぼす効果. 子どもの心とからだ22:69-75, 2013
- 9) Ruchkin V, Kuposov R, Schwab-Stone M:The Strength and Difficulties Questionnaire:scale validation with Russian adolescents. J Clin Psychol. 63:861-869, 2007
- 10) Arnold, D. S., O'Leary, S.G., Wolff, L.S, et al.:The Parenting Scale:A measure of dysfunctional parenting in discipline situations. Psychol Assess. 5:137-144, 1993

- 11) Sanders M. R, Markie-Dadds C, Rinaldis M, et al.: Using household survey data to inform policy decisions regarding the delivery of evidence-based parenting interventions. *Child Care Health Dev.* 33 : 768-83, 2007
- 12) カレン・ターナー, キャロル・マーキーダッツ, マシュー・サンダース : グループトリプルP 前向き子育てプログラムファシリテーターマニュアル. QLD, Triple P International Pty Ltd, 2000, p46-47
- 13) Matsuishi T, Nagano M, Araki Y, et al.: Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain Dev.* 30:410-415, 2008
- 14) 井濶 知美 : Parenting Scale 日本語版の作成および因子構造の検討. *心理学研究*81 : 446-452, 2010
- 15) G.B. Spanier: Measuring dyadic adjustment: New scales for assessing the quality of marriage and similar dyads. *J Marriage Fam.* 38:15-28. 1976
- 16) SH, Lovibond PF: Manual for depression anxiety stress scales. (2nd ed). Sydney, the Psychology Foundation of Australia inc, 1995
- 17) 国税庁 : 平成24年分民間給与実態統計調査—調査結果報告—. 2013